

神戸のこと 手当り次第

淀川長治
え・中 西 勝

「ええとこ、ええとこ、聚楽館、わるいとこ、わるいとこ、ナンヤラ座」という流行語がその昔はやったことがある。東京でいう「今日は三越、明日は帝劇」みたいな貴族的あこがれが神戸式にずばりと申すと「ええとこ、ええとこ」になる。

この聚楽館に大正十一年の暮れであつたろうか露西亞舞踊劇と称する一座が一行二十名あまりでやって来た。技芸員のアンナ・パヴロワを筆頭に、これに加えて音楽指揮のセオドル・スタイナーとモスコウ・オーケストラ団。

この聚楽館はだいたい東京の帝劇をそっくりまねた感じで場内正面の舞台の前方のアーチ型の天井の壁画の泰西名画風の天使のさまざまな油絵の美しさ。またロビーから一步玉じやり敷きつめた庭に出ると、小さな噴水のたえまなく流れ出る水音のやさしさ。そのあたりにはテーブルと椅子が植えこみの木影にならんで夜空を仰ぎながらサイターを飲んだ楽しさ。そんな聚楽館が好きだったが、またここで演るものもみんな上等で、しかもこんどはアンナ・パヴロワとかいう「えらい人」が来る。当時の新聞が一頁ちかくもさいてこの舞踊団を紹介もしている。これは一流の芸人にちがいない。そこで私は見なければならぬまいと決心をした。



両親を説くと、父はその新聞広告をじっとみつめて、「これはやめとき、来月には天勝も来ることやさかい、それ見せたる」と云う父はなにをシロツと見つけていたのであろうかと覗くと、その一座の入場料が、たしか特等十二円、一等十円、二等八円とかいうその値段表。なるほど無理もない今から四十年もむかし、十二円とは現価では一万円にも等しかろう。

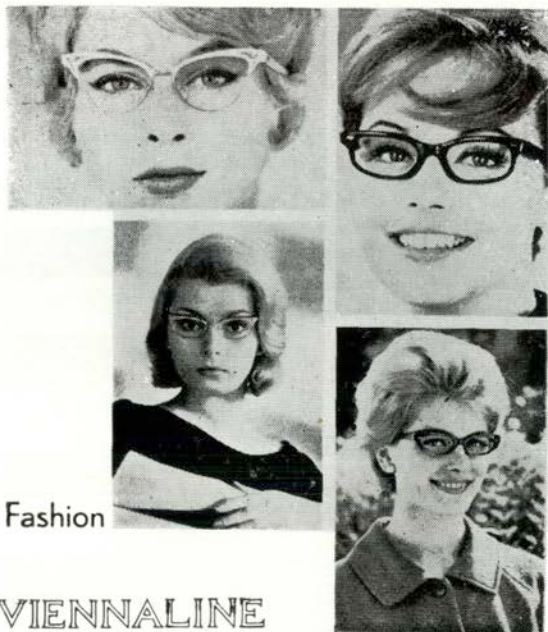
それでも私は一人で見に行く決心をして、一番安いところの天井さじき、これでも当時としては立派なお値段の一金二円也。机のヒキダシをひっくり返すと一円八十銭しかない。父に母に云えば二十銭がとくくはいくれるであらうが、えい、一人で自腹で行ってこませ……というわけで古本を五冊あまりひそかくし持って古本屋に駆けつけた。生れて初めて自分のものを売って人さまからゼニを頂いた。これが五十銭に売れて、入場料の二円につりが出た。

なんせ天井に近い席。そこで今でいうオペラ・グラスをしっかと握って、さて、なにを演るのであらうとプログラムを覗くと、「花々のめざめ」ドリゴ作曲とある。やがてシャンデリアがすーと消えオーケストラ・ボックスにライトがあたり西洋人の指揮者が現われると万雷の拍手。けれどもやがて演奏が始ってもなかなか幕があかぬ。「なにしとんねん、いつまで音楽ばかりやとんねん、舞台では舞踊家がまだ初日やさかい揃わへんねやなア、あはたれ」私はそんなひどいコトは思わなかったが、それに近い気持ちでいると、やがて音もなくスーッと幕が上がった。びっくりした。前に二人、うしろに三人、世にもきれいな純白の女が、両手を柔らかに開いて、前の二人はひざを下ろして、うしろの三人はつま足で立って、それが右の肩に小さな花をつけ、十秒、二十秒、三十秒、びた動きもしない。絵か人形か。私はかたづを呑んだ。やがて中指の先きからかすかに動き始めたその動きが手首に腕に肩に胸にと動きが次第に静から動に、そしてやがて足さきの滑るような前進開始とともに五人が揃って両手をひろげフットライトの前にせいぞろいした時には私は思わず「アッ」とうめき声を出しかけた。

やがて「コッペリ機械人形」「眠れる皇女」となると私はこうふん状態。クルピンスキイ作曲という「ポウランドの結婚式」ではそ

のリズムその振付けまでもが今もって目に浮かびそのメロディが現にいまも口に出せるほど印象あざやかだ。そしてその私のこうふんはサンサーンの「瀕死の白鳥」にいたって頂点に達し……これはイケナイ。そう思った。衆楽館の表に立って、私はそのはねてからどんだん観客が家路に急ぐ中を唯一人三〇分も四〇分もその「瀕死の白鳥」の大きな西洋製ボスターの前に立ち、それをうち眺め、もう一度これはイケナイ……そう思った。こんな芸術を私は一生よごと暮らすことは私にとって罪悪だと決心した。私はこの夜からほんとうに舞踊家になろうと決心をした。

それで翌日の夜は、この催しは毎晩たしか八時が開演だったので七時まえからもう出かけ、こんどは両親から六円づつもぎとって特等席の当日売り、これがうまくたった一人というわけで手にはいり私は前から数席目のすこぶる上等の席で、心ゆくまでたんのうし、当夜はこれまたパウロワの十八番ものの「トンボ」クライスラー作曲にめまいのする感激を受けた。その公演のあと私は非常口をひそかに開けて楽屋口にしるのびこみ、パウロワに、せめて一座のボーイであろうとも皿洗いのコックであろうとも、どうか加えて下さいませ……と頼みに出かけ、さてその人の渦の華やかな楽屋の入口で、私はシガーの匂い、花かごの山の中で、とうとうおじけづき一歩二歩とあとすざりして、とても思いもかなわぬと逃げ帰ったのだが、あああるとき、思いきって弟子入りさえしてをれば今ごろは天下一の舞踊家になっていたであろうに。しかし、あのあといろんな人の舞踊書を買集めパレエのなんたるかを学びとり、さて、ひるまのすいて人ひとりをらぬ町の銭湯の大鏡の前で、やわらかく両手を頭上で曲げ、つまさきで立ち、首をやさしく曲げた、その私のポーズに、私は、ああ、これは「ハクチョーの湖」ではない、これはまさに「バクショーの湖」じゃないかいなアと、さめざめと泣きはしなかったが、とうとう、思いきって、あきらめましたね。そのときに。



Fashion

VIENNALINE

世界のめがねがやって来た

神戸眼鏡院

元町3・電③3112-3・0551(貿易部)

大阪・心斎橋に「芸夢」が誕生!

Salon de Bijoux



神戸トアロードのアクセサリーの店
「芸夢」が、大阪心斎橋名店街(小
大丸ビル)に、シックでユニークな
神戸の香りとセンスをおりこんで、
新しいお店を開きました。
楽しいオシャレで、あなたの暮しに
夢をおくる店「芸夢」でお買物をお
たのしみください。

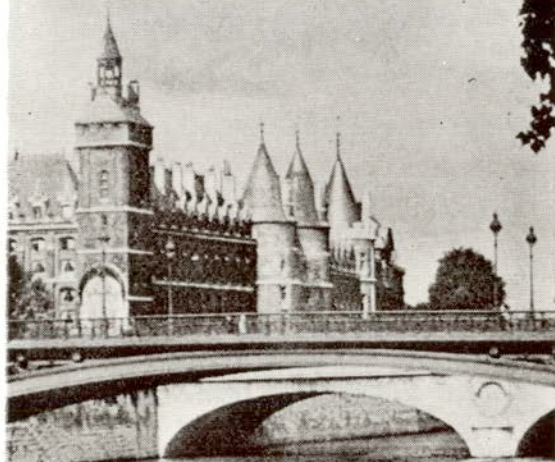
コスチュームアクセサリー

芸^{げい}夢^む

神戸店 / トアロード 38643・2293
大阪店 / 心斎橋ロビー (211)5153・1044
心斎橋名店街(小大丸ビル) 211-8503

FUGETSUDO

- コーヒー
- マロニエ
- コウモリ
- パビヨット



フランス洋菓子
老舗の味覚

創業 明治三十年



風月堂

神戸・元町三 TEL. 神戸 ③ 695・696

O-SHIBATA



柴田音吉洋服店

神戸・元町通4丁目 神戸 4-0693

大阪・高麗橋2丁目 大阪 231-2106





連載第三回

■神戸とエトランゼ■

神戸ベীবから 温泉研究家へ

陳 舜 臣

本誌先月号の座談会『はくらの神戸っ子』で、一ばんふるい橋爪さんが、「もっと古い人でエリオンさんがあります」とおっしゃった。橋爪さんが神戸に来られたのは一八九七（明治三十年）で、それより古いといえ、年代はおよそわかりだろう。

そのC・エリオンさんを北野町二丁目のお宅に訪ねたエリオンさんの国籍はオランダである。明治五年にお父さんが来日した。大阪、神戸間にまだ辻斬が横行していたころだ。

生田神社西、いまのユーハイムからYMCAにかけてが、空襲で焼けるまでエリオン邸だった。そこで生まれたエリオンさんは、外国人ながら、生田神社の申し子みたいなものである。やはり前号の座談会に、生田さんの

お祭りにはお小遣いを二銭もらって行ったとあるが、そのころ縁日の露天に『一銭九厘屋』というのがあったそうだ。陳列されている商品がすべて一銭九厘均一だった二銭だすと一厘のお釣だが、実際にお釣を返すのではなく、一厘分のオマケがつく仕組みなのだ。この一銭九厘屋の元祖は中国人だそうだ。

「いかにも中国人らしい商売のやり方だ」

「はい、そうですか」

生田さんの境内を駆けめぐって育ったエリオンさんは学令に達すると諏訪山小学校にはいった。

「このあいだ、町で年配の紳士から『エリオン君じゃないか』と声をかけられてね、誰かと思ってよく見たら白髪こそ生やしているが、諏訪山校時代の同級生の田村

君だったよ……」

昔話に花が咲いた。エリオンさんの隣りに松方幸次郎の息子の松方義行君が坐っていた。その人は姓を森村とあらためて、東京で商社会社をやっておられる。田村さんは早速かつての松方君、いまの森村君にエリオン君との再会の模様を伝えた。森村さんは毛筆で旧友エリオン君に、何十年ぶりで手紙を書いた。

いくら毛筆で書いても、エリオンさんはべらべらと読める。

「私は夏目漱石が好きでね。いまの作家では、獅子文六さんがたのしいよ。『箱根山』なんか……谷崎潤一郎さんのときどき読みますな。瘋顛老人日記も読みました」

諏訪山校を出てから、エリオンさんは、英人ヒュー氏経営のヒューズスクールに転じた。しかし、日本の中学校以上の課程は、家庭教師について継続して勉強されたそうだった。

青い目のエリオン少年は、日本人のこどもたちにまじって遊んだ。トーアロードのうえ、いまの花屋草薬園や東天閣のむかいには広っぱで、腕白小僧の遊び場だった。東天閣はむかしビショップという姓の外人一家が住んでいた。そこにもゴンタなこどもがいたが、外人少年たちはその原っぱを「ビショップの野原」(Bishop's field)と呼んでいた。

「日本のこどもたちは、その原っぱをオリベヤと呼んでましたが、あれはどういう意味でしょうかな?」

エリオンさんはそうおっしゃった。エリオンさんにわからないことがこちらにわかるはずはない。稲垣足穂氏にお会いしたとき、あの原っぱはむかし「オリルベ」と称したと教わったが、氏も正確な誤源はご存知でなかった。

もう家が建ちならび、原っぱの面影はまったくない。当時、こどもたちはそこをいろいろなことをして遊んだが、エリオン少年はおもに野球に熱中した。こうして、

後年『神戸ベープブルース』と謳われた強打者兼名投手エリオン選手の素地が、その原っぱで養われたのである。

「これを見てください」

にこに顔で、エリオンさんはスクラップ・ブックをもつてこられた。古い新聞の切り抜きである。「神戸ベープ」は自称ではなかった。黄色く変色した英字新聞に若き日のエリオンさんがバットをかまえた写真がのつてその下に「Kobe Baboos: C. Allon」と註がついている。

KCC(神戸外人クラブ)がYC&AC(横浜外人クラブ)と対戦した記事で、エリオンが満塁ホームをかつとばした、とある。

その新聞の日づけを見る。——一九二二年。いまから四十年以上もまえ、私などまだ生まれていなかったころの話である。

「いまの外人クラブの野球チームはなつとらんです。なんですか? シーズンに十ゲームそこそこ試合をやらんそうじゃありませんか。われわれの時代には四十ゲーム以上やりましたよ。この年は四十勝四敗です」スクラップ・ブックを繰るエリオンさんの手にとまるのぞきこむと、一試合三ホームの記録をたたえた記事だ。

「カーンとうてば、場外でした。いまのアメリカ領事館のあたりまでとんだもんです」

エリオンさんは、華やかなりし青春時代の日々をなつかしむように、また頁を繰られる。その手がとまった。

こんどは新聞の切り抜きではなく、電報である。発信地は軽井沢、時は一九二三年(大正十二年)八月末。軽井沢で外人選抜チームが早大チームと試合をするから、是非助太刀にやってこいというのだ。『We need you』とある。「神戸ベープ」は欠かせない選手だったにちがいない。

エリオンさんはむろん、勇躍バットをたずさえて神戸を発った。横浜グラランド・ホテルに宿をとり、試合地の



エリオン邸の応接間で楽しく語らう
エリオン氏（右）と陳舜臣氏（左）

軽井沢へむかう。ところが、当時の早大チームはアメリカ遠征帰りで、滅法つよかった。外人選抜チームは大敗を喫した。

「相手も強すぎたが、こちらにも下手くそな宣教師の選手などがいてねえ……。しかし、負けるにしても、もっとカッコのいい負け方をしなくちゃね。ボロ負けだったんで、アホらしくなりました。試合がすんだら横浜で一服するつもりだったんですが、バカバカしいので横浜へ出ず、北陸まわりで神戸に帰ってきたんですよ。そのつぎの日が……」

試合は八月三十一日の土曜日、翌日は九月一日、関東大震災である。横浜グラウンド・ホテルは当日倒壊した。もし、まかりまちがってワセダに勝っていたか、あるいはもっとマシな負け方をしておれば、エリオンさんはそこで休むはずだったのだ。

晩白小僧時代から青春時代……エリオンさんの経歴は神戸から離れない。戦前にも戦後にも、海外旅行をしたことはあるが、短期間にすぎない。戦後世界漫遊旅行に出た六個月というのが、神戸を離れた最長記録ではあるまいか。

本国のオランダには、もう親類はいない。エリオンさんは神戸を離れる意思はない。しかし、反対に「神戸から離れてはならぬ」と命令された時期があった。

太平洋戦争がはじまり、オランダと日本は交戦状態にはいった。オランダ人のエリオンさんも資産凍結をうけた。が、辛うじて収容所入りは免れた。お父さんが明治天皇から旭日勲五等勲章をもらっていること、そしてエリオンさん自身がある日本のこどもの命を助けて、当時白根知事から感謝状を受けていることなどが考慮されたのだ。だが、「禁足」である。神戸市内から外に出てはならない。特高や憲兵の監視がきびしかった。

「苦勞なすつたでしゅうね?」とたずねても、エリオンさんはこの時期にはあまり触れたがらない。

「そうですね。外人の食料配給が月四円七十五銭という月もありましたよ……」

戦後貿易業を復活し、おもにアクセサリーを中心に手びろく扱ったが、数年まえに第一線を退いた。功成り名遂けてリタイヤ（引退）したのである。

「この年では、野球はムリです。ゴルフはやります。それから、ときどき好きな旅行をしたのしんでいます」

エリオンさんの旅行は、温泉地ときまっている。北は北海道から南は九州まで、日本全国の温泉、ほとんど到らざる所なしといつてよいだろう。しかも、あの熱海や箱根のように、鉄筋コンクリートの旅館のならんでいる所はお好きでない。タイル張りの浴槽よりも板張りの湯舟を好まれる。ひなびた、日本情緒のただよう無名の温泉に心をひかれるのだそうだ。旅行のたびに、じつに綿密なスケッチをされる。

交通会社の『旅』という雑誌の三月号に、エリオンさんは龍神温泉のことをお書きになった。その文章のエリオンさんの肩書は『温泉研究家』となっている。

「交通公社が勝手にそうきめちまいましたね」そう笑いながら言われたが、お年のわりに、顔色もつやつやとして、健康そのものである。

生田神社っ子——神戸ベープ——温泉研究家。

神戸におけるエリオンさんは異国の人ではない。この人より神戸のことをよく知っている神戸人が何人いるだろうか？ 流善三郎の神戸事件、河原兄弟の史蹟、梶原の井戸、えびらの梅、赤松城の抜け穴……エリオンさんはそうした神戸の史蹟がうしなわれつつある現状を惜しんでおられた。

「神戸市も、観光資源をおろそかにしていますね。外人客によるこぼれるのはドライブ・ウエイぐらい。もっとチエがあるはずですよ」

生田神社のひろい境内、陽が一ぱいあたるビショップの野原、白球が陽光を切って舞いあがる東遊園地の球場

そして、ひなびた温泉。——これがエリオン氏のたった人生コースである。つねに健康であかるい、影のないう道をあゆまれたのだ。このあかるさは、いかにも神戸的である。

暗い戦争の時期は悪夢として除外していいだろう。北野町の宏壮なエリオン邸の庭に、今日もさんと春の陽光がふりそそぐ。

（作家）



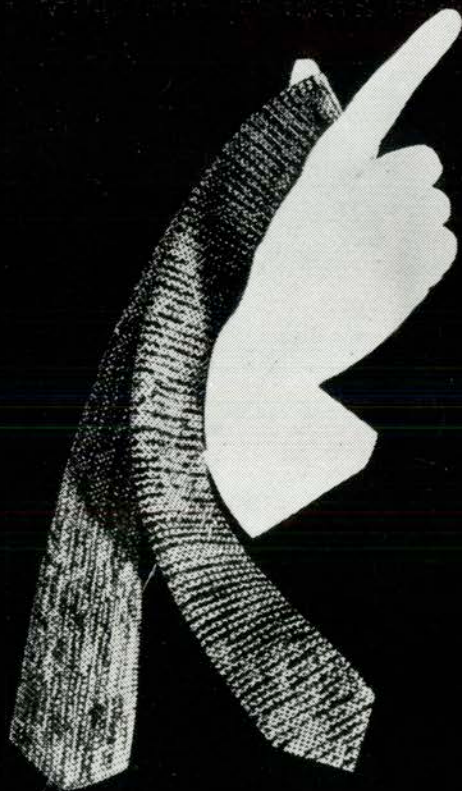
（春の陽光がさんとふりそそぐ
北野町のエリオン邸）



美しさを創る...

アスター・ニュートン

トア・ロード③1818



ネクタイの

元町バザー

神戸×元町 TEL③1401

④ 4月14日復活祭に新しい帽子をかぶるとあなたに幸せが訪れます

Easter Hat



婦人帽子

マキシシ

神戸・トアロード TEL ③ 6711-3
東京・銀座 3-2 TEL (535) 5041

特 選
ハンドバック
専門の店



シヲサ

元町2丁目・③ 0813

すてきなお嬢さん

こんにちわ！

きく人・岡部伊都子（随筆家）

話す人・新出昌子（洋菓子店のヒロタ従業員）

若くて、はつらつとした新出さんは、笑顔のとても可愛いお嬢さんでお店の人気者です。新出さんがニコニコすると相手の人も思わずニコニコしてしまいます。

その上、お店では第一線の販売で頑張っているらしい、もう5年間もお勤めになっているベテランです。

岡部 「まあ、いい耳をしていらっしやいますね。とても格好のいい、女らしい、耳をおもちなんですのね」

（笑）

新出 「私ね、あだ名がエベスさんなんです、私の会社の社長もニコニコしていらっしやるので、あなた社長のお嬢さん」とよく間違えられるんです」（爆笑）

岡部 「似ていらっしやるのね。この綺麗な耳、新出さんのたいへんな財産ですね——あなたはどちらからきていらっしやるの」

新出 「石川県からきました、高校を卒業してすぐ神戸にきて、もう5年になります」

岡部 「北陸なんですね、この間の雪害は大へんでしたでしょう、お家の方は」

新出 「こちらから出した手紙は随分遅れていましたが無事でした、冬になればしょっちゅうですから」

岡部 「石川県のどちらになるの」

新出 「能登半島の輪島から少し山に入ったところになります、いまは海岸線の観光客が増えているということです」

岡部 「それはいいところです、泉鏡花の作品の舞台になっていて釣をしているところが出てきますし、おいしいお魚の宝庫ですね。ご兄弟は？」

新出 「5人なんです」

岡部 「よくこちらにこれましたね、どういうことでこれしましたの？」

新出 「そうですね、田舎にいたら学校を出るとすぐお嫁に行くというのが常識で、封建的なところがあるんです。亡くなったおばあさんが「世の中は、なにかつらいことにあわないと一人前になれない」ということをいわれて、私も社会勉強のつもりで出てきたんです、でも、最初はこんなに長い間いる気はなくて、2年程のつもりでしたんです、でも、神戸はとても住みよいし神戸の方がよくなってしまう（笑）もう、家に帰りたくなくなってしまうました。出来れば神戸にいたいんです」

岡部 「新出さんはどんなお仕事なさっていらっしやるんですか」

新出 「お店の販売の方をやっています」

岡部 「同じお仕事をなさっていらっしやる方は何人程ですの？」

新出 「こんど、新入社の人とあわせると21人程になるんです。そして、早出と昼出と二組に分れているんです」

岡部 「お店の販売のお仕事をとおして、ご覧になつて、神戸の人達の気風は？お客さんなどの好みは」

新出 「大阪とは物凄く違うんですね、神戸のお客さんは、上品なんですね。大阪ですと、威勢よく「いらっしやいませ！」といひますし、神戸ですと、優しく「いらっしやいませ」というんです……商品も大阪と神戸では違います、神戸は高級品がよく売れるんです、いいものでないと駄目ですね」

岡部 「神戸人は生活を楽しんでいるのかな、とくに大阪の人より経済力が高いという訳ではないでしょうけれど、悪いけれどもネ……（笑）それでも、好みというか毎日の生活に対しての楽しみ方、考え方が違うんでしょうね。いかがです、こちらでお友達が出来ました？」

新出 「エエ、皆んない方ばかりですから、すぐお友達になりますし、お友達になって、お店をやめられた方でもいまだにおつきあひしていますの、O・A・A（青少年野外活動協議会）でもお知合いが増えましたしね」

岡部 「O・A・Aというのは、どんな活動をなさっているんですか」

新出 「私たち、月に二回、第一、第三の月曜日が休みになっていんですが、この休みのどちらか、つまり月一回、O・A・Aがいろんな行事をしてくださるので、商店がお休みのとき、一人でぼんやりするのは淋しいことですし、リクレイションとかゲームを企画していただいて参加すると、いい友達ができますし、ほんとに楽しいです——六甲山へキャンプに行ったり、スキーに行ったり、ハイキングも行けますしね——

そんな集いがありますと、近所の人達とも「お早よう」「今日わ」と挨拶も交えるようになりますものネ」

岡部 「ほんとに、いいことですね、殆どお店の休みをたくさんの人達がそろうて楽しめますネ」

新出 「やはり、一緒になってゲームをしたり、話をしたりしていますと、最初あまり好感をもてなかった人でも親しくなれば嫌でなくなりますもの、たのしいですね」

岡部 「それがいいですね。O・A・Aというような機構はとも一軒や二軒の商店の力ではできないことですし、いまのような、広い組織ができてほんとによかったですネ」

だから、O・A・Aに参加なさっているお店の社長さんたちは、人間的な理解のある人達だといえるでしょうね。ご自分の時間はどういうことでお過ごしになるの？」

新出 「めまぐるしい程の時代なんですから、自分の時間は出来るだけ、趣味とか教養を身につけて遅れないようにと思つていんです、会社でも厚生委員会があらつてお習字とか生花とか習えるようになっていんです——私が生花（末生流）をやっているんです——」

岡部 「リクレイションとか自分の時間を楽しんでいらつしやる時はいいんですが、いろいろな苦勞もなさつたでしょうね」

新出 「仕事の上でつらいというような事はないんですけども、父母から離れた頃は夜もなかなか寝つかれなくて汽車がとおると泣けてきてネ——汽笛は不気味だし——」

岡部 「それはそうですね。お店は鉄道も近いし。いまは綺麗な言葉を使われていますし、少しばかりの、なまりがかえつて可愛いんですけれども、言葉でも大変でしたでしょうね、石川県の言葉というのはどんなの？」

新出 「言葉では悩みました——恥かしいような言葉なんです。自分のことを、「おれ」といふんです、初め知らずに「おれ」いたら皆んなこわがってネ（笑）ほかに、駄目ということを「だつちゃかん」といつたり」

岡部 「よくこんなに綺麗に話せるように訓練なさいま



—写真には青谷の海星女学院の裏道を行く、岡部さんと新出さん（右）—

したね」

新出 「とにかく、お客さまの前にいくと恥かしくて、トイレに行って泣いたことがありますワ」

岡部 「それはそうだと思う、可哀想にね。いうつもりでなくともつい口にですものねエ」

新出 「最初、お店に出た頃はお客様から一番遠いところにいて、お客さまがこわかった。お見えになるとぐいさっしやいませ」というんですけど、大きな声を張り上

げたつもりでも、声になっていなくて恥かしくて」(笑)
岡部 「叫んだつもりでも声にならないのね、馴れるまで大分かかりました?」

新出 「ズツとお店の販売ですから、これが私の仕事だと思って向っていきまして、こんど新らしく入社した人達も同じような気持だろうと思うんです馴れればなんでもないことなんですけれどもネ」

岡部 「だから、自分にとってやりにくいことを克服したら、非常に自由になりますね、驚ろかなくなるし、安らかなりますネ、ほかに困りになったことは?」

新出 「兄や叔父がこちらにいますので相談は出来ませんがやはり、いろいろと……」

岡部 「ご結婚のこと?」

新出 「はい、でもそんなときは故郷にかえりました。父母は出来れば故郷にいてお嫁に行つて欲しかったらしいんですけれども、私が嫌がるものですから、今は諦めていますネ」

岡部 「新出さんの理想の男性というとはどんな方でしょう、どんな人がいいですか?」

新出 「健康が第一で、仕事を大切に熱心してくれる人で、一緒に平凡な家庭をつくれればと思ってるんです。理想どおりいけばいいんですけど……」

岡部 「ほんとに平凡な幸福というのがなかなか手に入りにくくてね。私などべつに、高望みもしないのに、どうして手に入らないのだろうという怒りのようなものがありますね。あなたのような若い人は、これからなんですから、自分の心と違ふことに妥協しないようにね、自分を偽らないようにして下さいね、急がないで、あなたにとって相手の人がどういう意味があるのがよく確かめて選ぶことですね、なんといつても、物やお金ではどうすることもできない喜びや悲しみがありますから、——傷つかないようにね——あなたのことを欲得なしに心配してくれるご両親は遠い訳ですから、ほんとにご自分を大切にしてくださいね」

(文責・編集部)



私の好きなスター

ペギー・葉山

安水穂和

(詩人)

最近、ある会合の帰り道、三宮のあたりを歩きながら、多田智満子さんとシャルル・ペギーのことを話しているうち、いつのまにかぼくの話はペギー・葉山のことになっていて、笑ってしまった。シャルルのことはよくわからないがもう一人のペギーは、そう好きだ。昨夜もテレビにペギーさんがでていた。「マンマ」という歌は誰がうたっても、どんな歌い方をしても、それぞれ心にしみる歌で、ジューでも、ステファノでも、タリアビーニでも、はたまた五十嵐さんでも、それぞれに、すばらしい歌になるが、とりわけペギーの「マンマ」をほくは好ましくおもう。

それから庄司淳という男の子と向いあって坐って「大人と子供」を歌った。それから「ドレミの歌」を音羽ゆりかご会の子供たちと歌

った。最後に「調子をそろえてクリツククリツククリツク」を歌った。

「現代詩」という雑誌がこの正月号に新春対談を企画したとき、ぼくはある男の人と対談して対馬の話をしたが、岩田宏さんはペギーさんと対談してミュージカルの話をしていた。あんちくしょうめその対談で、岩田宏さんが「唄のことばが聞きとれないのは、歌い手が自分のウグイスみたいないい声を聞かせようと、それを第一に考えているからで、唄の内容を伝えることは二の次になっている」というと、ペギーさんが「わたしは声が低いでしょう。だから普段喋る高さで歌っているわけで、だから比較のことばははっきりできるのかもしれない」と答えている。

このところがなかなかいいと

ところで、ペギーさんの「マンマ」がぼくにとって好ましいのはこのゆえんだ。「普段喋る高さで唄の内容をよく伝える」これだ。庄司淳ちゃんが「なぜ、ね、ママ、空は青い？」とたずねる。ペギーさんは「普段喋る高さで」これに答えて歌う。これだ。

「この天にかかる虹」で知った市原悦子さんはすばらしかった。市原さんに出てもらうドラマを近々書きたいとおもっている。これと同種のねがいで、ずっと以前からのねがいが、ペギーさんにぼくの詩をいつか歌ってもらいたいとおもっている。

ペギー、ペギーともうだいふ、耳にタコができる頃なのに、今だに、ペギーさんのテレビをみていると、うちの奥さん、横で笑うので、どうもテレビがみにくい。

(写真はペギー・葉山)

ヤマハエレクトーン

●シリーズ③

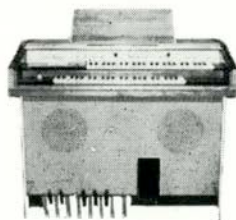


手軽に楽しめる
エレクトーン

葉山 泰子

(大阪音楽大学3年ピアノ科)

フルートの音、マンドリンの音、ベースの音、チェロの音、オルガンの音 etcと、エレクトーンはいろんな楽器に似た音が楽しめます。自分でその音をあやつりアレンジして弾く楽しさは、オーケストラの指揮者になったような素晴らしさです。お稽古も気軽に出来ます。



B 1

¥ 248,000

いす ¥ 5,000



神戸もとまち

日本楽器

元町通2丁目 TEL 代表 (39) 3151

世界中の人からほめられた
日本の誇り 神戸のほまれ
マロングレッツセは
ヒロタの銘菓

元町通三丁目 TEL ③二三四〇番

世番中で 飲まれている アサヒビール

それは殆んどが

神戸港から船積み……

「ビールはアサヒがおいしい」とか「サンライズ（朝日）のマークに限る」とかいう外国人が増えてきました。

Why?

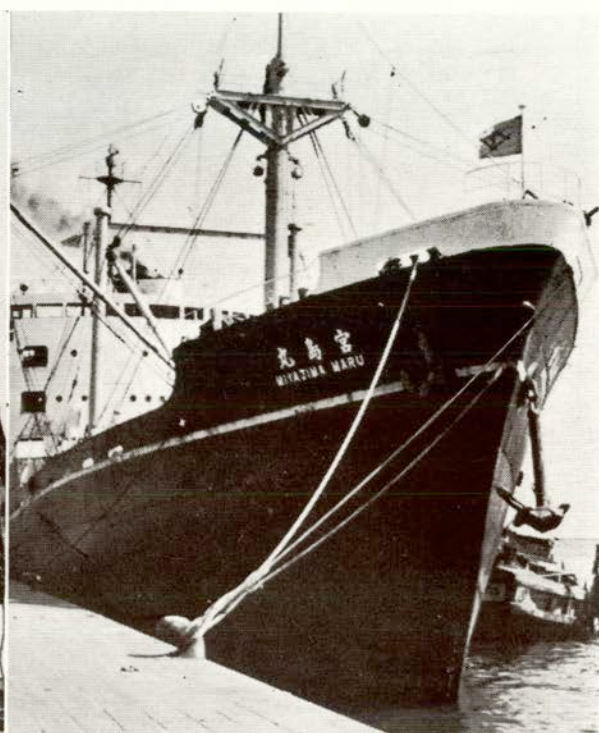
ビールの輸出は各メーカーの大きな課題になっていますが、輸出ビールは「アサヒ」が絶対優位を誇っているからです。

戦前から輸出ビールは、技術的に困難だとされていましたが、アサヒビールの醸造技術は、この条件を完全に克服して、完璧な輸出ビールをつくり出し、選ばれたアサヒビールが世界各地に進出して貴重な外貨を獲得しております。

特に最近の輸出の増加は目ざましく、アメリカ、ハワイまた遠くアフリカまで進出し、特にビールの見本市といわれるアメリカでさえ、アサヒビールは最高の値段で販売されております。

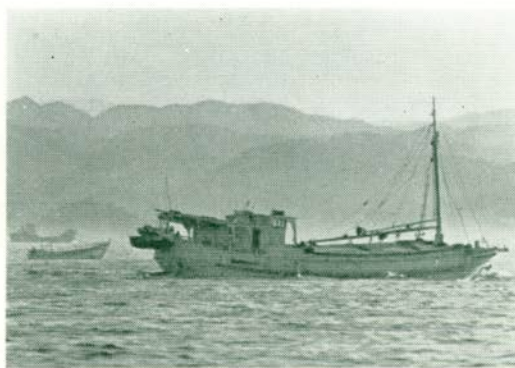
強気のアサヒビールでは「今年はアメリカ向けの輸出を中心に市場を開拓して行き、年間60万ダースを目標に頑張ります」と意欲的なところを示しています。

東でも西でも世界の各地で愛されているビールが、関西の生んだアサヒビールであり、船積みされる殆んどが神戸の港からというのは愉快じゃありませんか。乾杯！（写真は神戸港でのネオボルネオ向け輸出ビールの船積み）



春の海

伊達俊太郎



新聞の片すみに「花だより」がのるようになった。もう弥生四月。新聞記者になって初めて書いたのが「○○公園、つぼみふくらむ」という、わずか十一字の記事だった。毎春、夕刊の最下段に花だより第一報をみつけると、十一字の記事を下宿のカベにはりつけて一日中ニコニコしていたあの日のことを、きまってる思い出す。あれから、もう四回目の春である。

ことし、ミナトの春は「ときわ丸海難事件」で始まってしまった。二月二十六日未明のあの惨事がおきてか

海峽をそおと通りすぎていく――。

つかれていたのだろうか、ぼんやり春の海をみていると、体の筋肉が暖い潮風に吹かれてずるずるとほどけていくよう。同行のA記者とふたり、砂浜に寝ころんで、そんな怠惰な解放感を楽しんでみた。空を見上げたのさえ久しぶりのような気がする。

「春は静かな方がいいなあ」先輩のA記者にぼくが話しかけた。

「花だより記者のお前さんも、老いちゃったじゃないか若いヤツがそんなことをいい出しちゃあかん。そんなせりふは四十過ぎてからで結構や」――ことし長男が中学に入るといふA記者は、怒ったようにボソリと答える「事件にとびだすのがうれしくてしょうがないって氣をなくしたら記者稼業ももうおしまいやなあ。オレにはもうバタバタかけ回る若さのうなった……」

A記者はそういうなり目を閉じてしまった。

初心忘るべからず――。花だより記者の懐想は、けたたましいサイレンの音で消しとんでしまった。眠っていたはずのA記者は、ひよっくり起き上がると、百層ほど離れた電話ボックスに向かって走り出した。一生懸命走っているのだが、歩いているような早さだ。シラガまじりの長髪が春風にゆれ、坂道を上がる馬車馬のような荒い息づかい……。追い越しかねていたぼくだったが、ボックスのすぐ前で思いきって前にとび出し、先に受話器にしがみついた。

「チキシヨウ足の速いヤツだ。脚力じゃあまだ負けぬつもりだったんやけど……」

火事場へ急ぐ車の中でA記者がニヤリと笑った。ついさっき「もうオレはつかいものにならん」といった先輩記者のヒタイには汗の玉がやたらに並んでいた。

ふたりは声をたてて笑いながら車窓からまた海をのぞいた。須磨の海は、こんどはキラキラと輝き、わたしたちにサヨナラをいっていた。

(新聞記者)

ら、記者連中はみな事故の既報、詳報集めにキリキリ舞い。眠るのを忘れるような忙しさだった。遺体捜索、衝突原因の調査、衝突船乗組員の取調べ状況、遺族の補償問題……つきつぎと出てくる仕事が一段落したら、二月の海は、もうすっかり春の色に変わっていた。

事件が片づいたある日の昼下がりのこと。仕事で遠出した帰りに須磨の海岸で車を止めた。夜、昼なく夢中で事件を追いかけているうちに、鉛色の水は、透明な輝きを取戻していた。波はおだやか。沖をゆく船はかすみの